

郷土室だより

第172号

令和4年3月18日

編集・発行

中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 3-098

『中央区から消えたモノ』③

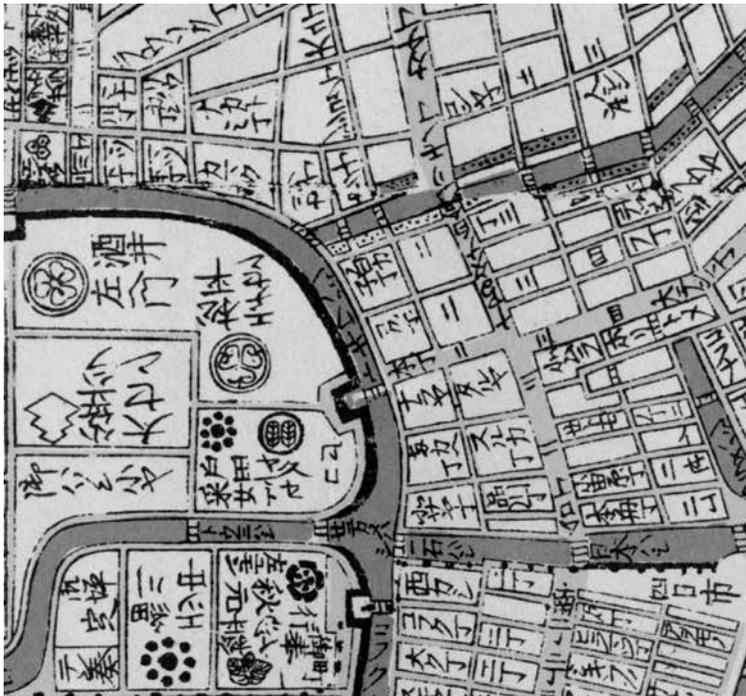
前号では中央区にあった水上学校や渡し船のを中心に書きましたが、時代が変わるにつれて川の周辺も姿を変え、少しずつ現在の中央区が形成されていきました。1962(昭和37)年に開通し、首都圏での生活において欠かすことのできないものとなった首都高速道路もその一つで、日本橋川に架かる日本橋の上にも走っている首都高の辺りは、江戸時代、車ではなく船が行き交う場所でした。

◇日本橋魚河岸の始まりと繁栄

現在の日本橋から江戸橋にかけての日本橋川には「日本橋魚河岸」と呼ばれた場所があり、江戸市中で消費される鮮魚や塩干魚を荷揚げする魚市場として繁栄していました。日本橋のそばに魚市場が開かれるきっかけとなった人物は、摂津国佃村(現在の大阪市西淀川区佃町)の森孫右衛門だったと言われています。森孫右衛門は、徳川家康が伏見に在城の際に魚類の納入を務めたり、中国、

四国地方などに家康幕下の人々が隠密に往来する際、漁船を使って通行させたりしました。また、『日本橋魚河岸物語』などでも少し触れられています。大坂冬の陣や夏の陣では、軍船を漁船仕立てにして「お魚ご用」とし、毎日、家康の本陣へ注進したとも言われています。

衛門ほか佃村、摂津国大和田村の漁師たちは家康とともに江戸に移って来た後佃島に住み、幕府への魚類の納入を務めることになりました。また彼らには江戸内湾での特権的な漁業権が与えられたことに加え、江戸の漁師よりも漁業の技法に秀でていたことから漁獲高は年々増加していきました。ちなみに、この



道三堀・日本橋川付近(「文化江戸図」部分)

技法は地獄網という大量漁獲法であり、それまでの四つ手網、一本釣りといった漁獲法とは一線を画すものだったようです。漁獲量の増加により幕府納入の魚が余るようになると、孫右衛門の弟、九左衛門は、その余りの魚を一般に販売する許可を得て、道三堀に面した場所に魚問屋を開いたことが魚河岸の始まりになったと言われています。ただし、この時はまだ漁師が水揚げした魚をそのまま並べて売る、という簡素なものであり、その後の佃島での漁業の盛況と日本橋魚問屋の発展を経て、生産と販売が区別されるようになっていきました。

日本橋北東詰に立つ「日本橋魚河岸跡」が示しているように、魚河岸は、日本橋から江戸橋にかけての河岸地を中心に栄えていきまされた。この場所では、日本橋川を利用して運んできた様々な魚介類を、棧橋に横付けした平田舟の上で取引し、表納屋の店先に板舟を並べて魚を売っていました。そして魚河岸は日本橋川沿いを中心として、本船町・小田原町・安針町（現在の日本橋室町一丁目・本町一

丁目）の広い範囲に魚河岸が広がっていくことになりました。

◇築地市場開場へのみち

では日本橋魚河岸は何がきっかけで無くなってしまったのでしょうか。明治維新後、道路、鉄道、港などのさまざまなインフラ整備が進み日本橋が発展していく中で、1888（明治21）年、「東京市区改正条例」が公布され、日本橋魚河岸は10年以内に箱崎、芝、深川のいずれかに移転することが決まりました。1880年代に東京でコレラが大流行し、日本橋魚市場の不衛生な環境が問題視されていたということも一因であると言われています。

ところが、移転に伴う費用が業者自身の負担だったことや、伝統的に日本橋の魚河岸で営業をつづけてきた問屋の保証をどのように扱うかなど、様々な問題が重なり合い、移転の話は一進一退を繰り返していました。そして明治半ばごろから日本は戦争による大戦景気に沸きますが、その後の急速な物価の高騰に伴い、1918（大

正7）年には全国でいわゆる「米騒動」が広がっていきます。これをきっかけに、政府は安定した食料品の供給と物価の安定を図るため、1923（大正12）年「中央卸売市場法」を制定しました。この市場法は、地方公共団体を市場開設者とし、問屋と仲買の仕事を分け、価格は競りで決めるというものです。全国でも京都市（昭和2年12月開場）や高知市（昭和4年12月開場）などで次々に中央卸売市場が開設されていきますが、この時も東京では既存業者の統合収容や施設の整備などの問題により市場建設はなかなか思っていたように進みませんでした。

しかし、1923（大正12）年9月1日に起きた関東大震災により、日本橋魚河岸は移転せざるを得なくなり、東京に壊滅的な被害をもたらしたこの大震災は、日本橋の魚河岸も焼け野原に変えてしまいました



（震災直後の日本橋魚河岸附近）

興を図るため、震災から16日後の9月17日には芝浦に仮市場を開場、3か月後の12月1日には臨時市場として築地市場を開場しました。移転反対派の商人の中には、従来から店があったところに仮設の店を作り商売を始める人もいたようですが、政府から戒厳令が下され日本橋魚河岸が立入禁止区域になると、警察による取締りもあり、日本橋で営業を続けていくことは実質的に出来なくなっていました。

こうして紆余曲折を経て開場した築地市場は、帝都復興事業としてその後も整備されていきます。魚市場という魚の売買や競りを思い浮かべる方も多いと思いますが、築地に移転してからは見学者や観光客など、一般の人が訪れ、利用することが出来る場所も増えていきました。築地場外市場などはその典型で、築地市場の北側一帯に、場内市場では手に入らない昆布や鰹節、調味料や調理用品などを扱う製造加工問屋街ができ、それらが発展し今の場外市場の形が出来上がっていました。

◇中央区を離れ、豊洲市場へ

市場としてだけではなく観光地としても栄えてきた築地市場ですが、東京の爆発的な人口の増加による取扱量の増大や、施設の老朽化などの問題もあり、度々新市場への移転の話が持ち上がるようになります。昭和60年代には正門仮設駐車場の建設や仮設卸売場の増設など、市場施設の整備拡充が行われていましたが、1972（昭和47）年の「第一次東京卸売市場整備計画」において、築地・神田市場の機能分散のため、大井埋立地に近代的総合市場を建設することが決定すると、日本橋魚河岸の移転の時と同じように、この時も市場関係者の反対を受けることになりました。東京都と市場関係者は移転案と再整備案の両方について話し合いを重ねますが、意見は割れ、1985（昭和60）年には築地本願寺で移転反対の総決起大会が開催されるなど対立は激しくなるばかりでした。

それでもこの築地の整備計画は移転の方向へと舵を切ることとなります。1997（平成9）年に

大井ではなく現在の豊洲への移転案が出されると、翌年には築地市場の業界6団体により、東京都に

「臨海部移転についての検討要請」が提出されました。また2000（平成12）年、当時の市場長は築地での営業を行いながら長期的な築地の再整備を行うことは困難であるとの見解を示し、その翌年、「第七次東京都卸売市場整備計画」において、ついに豊洲への移転が決定します。そして2018（平成30）年に豊洲市場は開場しますが、築地の場外市場については豊洲への移転後もその形を残し、国内、国外を問わず多くの観光客で賑わっています。

◇終わりに

3号にわたり、「中央区から消えたモノ」をテーマに郷土室だよりを発行しましたが、いかがでしたでしょうか。歴史を紐解くと、私たちの日常からは様々なものが失われ、景色が変わり、またそこ

新たな歴史が生まれてきたことが分かると思います。今号の舞台となった日本橋についても、高速道

路の地下化が決まり、これまでとは違ったまた新しい景色が見られるようになることでしょう。さらに、地域資料室がある京橋図書館は、令和4年度中に八丁堀駅近くへの引越しが決まっています。昭和48年から始まった「郷土室だより」の発行は今号で終わりとなりますが、今後もまた新しいかたちで地域の文化や歴史情報を発信していきたいと思っています。

最後に、これまで発行した「郷土室だより」の目次をまとめさせていただきます。一号〜九九号までは一〇〇号に、少し重なりますが六八号〜一五〇号までは一五一号にすでに掲載しております。一五一号〜一七一号までは本号の最後に載せています。また、今まで発行した「郷土室だより」のバックナンバーは、地域資料室で配布しているほか、中央区立図書館のホームページでも閲覧やダウンロードが可能ですので、ご活用いただければ幸いです。長きにわたる「郷土室だより」をご愛読いただきましてありがとうございます。

参考文献

書名	著者	出版社	出版年
中央区沿革図集 日本橋篇	中央区立京橋図書館／編	中央区立京橋図書館	1995
中央区沿革図集 京橋篇	中央区立京橋図書館／編	中央区立京橋図書館	1996
日本橋魚河岸物語	尾村幸三郎／著	青蛙房	1984
魚河岸の流儀。-日本橋 築地 豊洲-	東京水産振興会／企画	東京水産振興会	2020
築地から豊洲へ	小松正之／著	マガジンランド	2018
築地市場クロニクル完全版1603-2018	福地享子／著	朝日新聞出版	2018
日本橋魚市場の歴史	岡本信男／著	水産社	1985
魚河岸百年	魚河岸百年編纂委員会／著	日刊食料新聞社	1968

◇鈴木理生先生追悼特集

(一五二号)

◇「江戸・東京の川」中央区の川
(一五二)一六九号・全十八回

このシリーズでは、河川やあまり資料がない河岸についても論じ、江戸時代から姿を変え続けた中央区の姿を詳しく解説しています。

(一) 内はその号のおおよその内容を示します。以下同じ)

一五二号 (1) 「江戸」震災前の水路とその役割」

突然ですが、帝都復興事業を切り口に、現在の水路／江戸の水路／明治初期の水路／震災前の河川・運河について、東京市内の運河／河川の利用状況／工場・倉庫地帯と運河

一五三号 (2) 「江戸湊と河岸」

江戸湊と河岸／江戸湊／初期の河岸／その後の河岸／河岸の名称の特徴は、江東地区の河岸一五四号 (3) 「河岸地の変化と物揚場」

物揚場とは、『武州豊嶋郡江戸庄図』(寛永江戸図)をみる／河

岸地の行政／河岸地の変化／河岸地に正式名称

一五五号 (4) 「江戸の河川の姿」

江戸のはじまり／平川は外濠川(日本橋川)の原形／旧石神井川とは、放水路(神田川、仙台東堀)がつくられる／放水路が運河に変わる／道三堀と小名木川が最初の運河／平川から外濠川へ／汐留川は排水路

一五六号 (5) 「水上交通の中心的な役割を果たした日本橋川」

日本橋川の原形／旧石神井川の付け替え／埋立が進む八町堀地区と新堀／あらためて水路を確認します／明治・大正期の日本橋川／震災復興事業で日本橋川は、震災復興と日本橋川に架かる橋

一五七号 (6) 「戦後から現在にかけての日本橋川」

戦後の改修工事／カミソリ堤防の建設／水路の上を高速道路が走る／河川法の改正で日本橋川が変わる／日本橋川の現状／日本橋川に架かる橋／日本橋川筋の河岸／『江戸十組問屋便覧』では、『諸問屋名前帳』から分

布をみる

一五八号 (7) 「日本橋川沿いの河岸」

北鞆町河岸／品川町裏河岸／魚河岸／末広河岸

一五九号 (8) 「日本橋川沿いの河岸」

鰻河岸／北新堀河岸／西河岸／元四日市河岸／木更津河岸／南茅場河岸

一六〇号 (9) 「日本橋川沿いと東・西堀留川の河岸」

南新堀河岸／日本橋川の河岸地には問屋が集中／東・西の堀留川について／江戸期の堀江町入堀／明治期の堀江町入堀／東堀留川周辺の洋鉄問屋／舟運の変化／転機となった震災復興事業／当初の計画では神田川まで延長／東堀留川の改修と西堀留川の埋立／戦災残土で埋立／堀に架かる橋

一六一号 (10) 「東・西堀留川の河岸と埋立」

東堀留川(堀江町入堀)の河岸／東萬河岸／西萬河岸／西堀留川(伊勢町堀)／水路の一部が埋立

一六二号 (11) 「西堀留川の河岸」

震災後の復興事業で消失した水路／堀にかかる橋／西堀留川（伊勢町堀）の河岸／伊勢町河岸（塩河岸）／伊勢町裏河岸／米河岸／小舟河岸
 一六三号 (12) 「箱崎川の埋立と中洲の変遷」
 箱崎川／久世堀／中洲の造成と三股富永町の成立／中洲の復活と箱崎川支川／高速道路の建設／箱崎川と箱崎川支川の埋立／反対運動が起きたが
 一六四号 (13) 「箱崎川とその河岸」
 箱崎川・箱崎川支川に架かる橋／箱崎川筋の河岸／菖蒲河岸／蛸殻河岸／行徳河岸と行徳船／永久河岸
 一六五号 (14) 「江戸と昭和の楓川」
 楓川は海岸線だった／新しい埋立地をつくる／進む沖合の埋立て／九本の船入堀が開削／楓川周辺には材木関連の町が集まった／明治・大正期の楓川／震災復興事業と楓川／水路が高速道路に／楓川に架かる橋
 一六六号 (15) 「楓川とその西側の河岸」

楓川に架かる橋（続）／楓川の河岸／本材木河岸
 一六七号 (16) 「楓川とその東側の河岸」
 楓川東側の河岸地／楓河岸
 一六八号 (17) 「京橋川の歴史と橋」
 京橋川が開削された／東海道のコース変更と京橋／京橋川が正式名称に／震災復興と水路の改修／高速道路の建設と水路の埋立／京橋川に架かる橋
 一六九号 (18) 「京橋川の河岸」
 京橋川の河岸／大根河岸／竹河岸／「太刀壳（立壳）」／白魚河岸
 ◇「中央区から消えたモノ」
 （一七〇〜一七二号・全三回）

このシリーズでは、中央区から姿を消した地名や渡船などをテーマに解説しています。
 一七〇号 (1) 「中央区の歴史と京橋図書館」
 京橋図書館は京橋にない？／中央区誕生／橋がないのに京橋／銀座だけでなく金座もあった？／新刊案内／調べもの
 の1冊
 一七一号 (2) 「中央区の水生活者と水上学校」
 3つの渡し船／水上利用業者とその子どもたち／水上小学校／戦後／新刊案内
 一七二号 (3) 「日本橋魚河岸と築地市場」
 日本橋魚河岸の始まりと繁栄／築地市場開場へのみち／中央区を離れ、豊洲市場へ／終わりに／新刊案内

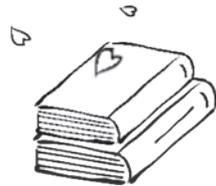
新列案内



武蔵野発見川つぶち生きもの観察記

若林輝／著 山と溪谷社

この本の舞台は隅田川の上流の黒目川と柳瀬川です。釣りが好きな著者が目の前でオオタカがコサギを捕食しているのを目撃して、まちなかの小さな川つぶちにも、野生動物の弱肉強食世界が広がっていることを知ります。著者は自分だけが知らなかったことと謙遜していますが、観察眼にあふれた読み物です。



江戸東京草花図鑑 岩槻秀明／著

エクスナレッジ

江戸とタイトルに入っていますが、各草花にわかりやすい写真と学名、花色、別名、科名、分布などのデータや豆知識、解説がついています。花の色別索引があり名前がわからなくても調べられます。見られる場所別から花を調べられることもでき、身近な草花が良くわかります。また読み物としてもハンドブックとしても利用できます。



東京 二〇二〇、二〇二一。

初沢亜利／著 徳間書店

2020年から始まったコロナ禍。未曾有の混乱の中、今も緊急事態が続いています。このような中、一人の写真家が東京を、東京の人々をそして風景を、カメラに収めた写真集です。カメラをおとした、コロナ禍の東京の写真から、何を感じられるのでしょうか。将来、今の時代について検証するとき、役に立つ資料です。

